



# 池田宣政「懐しき丁抹の少年」論： 児童文学作家の誕生とボーイスカウトとの関係を中心 に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国語探究研究会 公開日: 2026-03-06 キーワード: 池田宣政, 南洋一郎, 「懐しき丁抹の少年」, 児童文学, ボーイスカウト 作成者: 倉地, 智哉 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/0002000798">https://doi.org/10.32150/0002000798</a>

# 池田宣政「懐しき丁抹の少年」論

## ——児童文学作家の誕生とボーイスカウトとの関係を中心に

倉地 智哉

キーワード 池田宣政 南洋一郎 「懐しき丁抹の少年」 児童文学 ボーイスカウト

### 1 はじめに

池田宣政は一八九三年に東京府西多摩郡の東秋留村で生まれ、高等小学校卒業後、南満州鉄道株式会社東京支社などを経て東京府青山師範学校に入學し、一九一三年に同校を卒業した後は一九三五年まで麻布や牛込などで訓導を務めた(1)。池田宣政や南洋一郎などの筆名で旺盛な創作活動を展開することになる池田の作家活動の契機はデンマークで開催された第二回国際ボーイスカウト大会であり、「文筆活動を始めるきっかけは、大正一三年(一九二四)デンマークで開かれた世界のボーイスカウトのジャンボリーに日本代表の一員として参加した際の体験をもとにして、「なつかしき丁抹の少年」という短編を大正一五年「少年倶楽部」に投稿したのが最初であった(2)とされている。

池田の冒険小説については橋本順光「山田長政の秘宝譚」(『日本研究論集』一二号、二〇一五年一〇月)がその話型、同「上野動物園黒豹脱走事件(1936)とその余響」(『日本研究論集』一四号、二〇一六年一〇月)が不安の醸成という社会的影響、大道晴香「異郷から秘境へ」(『出版研究』五四号、二〇二三年三月)が戦後の改訂における意義を論じ、その他、小松史生子「小栗虫太郎『紅軍巴蠟を越ゆ』論」(『昭和文学研究』五六集、二〇〇八年三月)や山田昭子「新しき「ボルネオ論」」(『専修国文』九五号、二〇一四年九月)、水間千恵「サバイバーの食卓」(『川口短大紀要』三二号、二〇一七年一二月)などがその

帝国主義ないし植民地主義との関係性を指摘している。大道は「主に池田宣政名義では感動美談や伝記などの実話ベースの小説、南洋一郎名義では冒険小説といった具合に使い分けがなされていた(3)」と分類し、このうち「実話ベース」という池田名義の作品については佐藤宗子「物語の精錬過程」(『千葉大学教育学部紀要Ⅰ』四二号、一九九四年二月)や同「名作再話の確立」(『千葉大学教育学部研究紀要Ⅱ』四三号、一九九五年二月)がその児童文学の再話における方法や意識を論じている。しかし「池田宣政が、創作者としてのみならず再話者としても児童文学の世界に足跡を残したことはよく知られている(4)」とする佐藤は、池田の「創作者」と「再話者」の二側面のうち後者のみを取り上げ、池田名義の作品における前者の側面については十分な研究がなされていない。

池田の没後において三一書房の『少年小説大系』は一九八八年発行の六巻を「南洋一郎・池田宣政集」、一九九二年発行の二〇巻を「南洋一郎集」としてその作品を収めたが、両者の責任編集を担当した二上洋一は、池田の「懐しき丁抹の少年」(『少年倶楽部』一三巻九号、一九二六年九月)は「ボーイスカウト世界大会」の「思い出を感動美談にまとめた(5)」ものであると解説している。

本稿ではこのように大道が池田名義の作品の特徴とする「感動美談」の要素がすでに指摘されている池田名義の処女作「懐しき丁抹の少年」を注釈的に論じることを通じ、池田名義の作品に関する基礎的研究を試みる。

## 2 池田宣政とボーイスカウト

本稿の分析対象である「懐しき丁抹の少年」は一九二六年に池田宣政名義で『少年倶楽部』に掲載された後、池田宣政名義の『輝く凱旋像』(大日本雄弁会講談社、一九三一年)に「桜ん坊の想ひ出」として収録された。本作が同誌に掲載された経緯については、当時の編集長・加藤謙一が次のように回顧している。

大正十五年の夏のある日、池田宣政のふまさという人から「なつかしき丁抹デンマークの少年」という原稿が郵便で届けられた。さっそく読んでみたところ、十二、三枚の短いものだったが、日本からデンマークへ出かけた少年団の指導者の書いたレポートで、感銘させられる作品だった。こちらから頼みもしないのに飛びこんでくる原稿はおおかた問題にならぬものばかりなのに、これはまたすばらしい拾い物だということで、すぐ載せることにしたが、この筆者はいったい何人であるか、封筒には住所もない。岡山の池田侯ではあるまいかということになった。殿さまだから無造作で住所なんか書かないんだよと推理した。それでとりあえず池田邸に電話で伺ってみたところ、「御前ごぜんは今洋行中ですが、デンマークへはまいませんし、少年団にも関係しておりません」という返事だった。「御前」といわれたのが印象的で今でも忘れていない。「それじゃ少年団にきてみる」というので調べたら、日本の少年団の一行が世界ボーイスカウトの大会に参加して、ドイツ、フランスなどをまわってついこのころ帰ってきたばかりで、団長は三島章道氏みしまあきみち「三島通陽の筆名」、副団長は久留島武彦氏、それに池田さんも指導者としてついていたのだという。

その池田さんは、牛込の余丁町よちやうまち小学校の先生で池田宣政ではない、池田宣政だという。おどろいて封筒をみなおしたら、なるほど宣政である。私をはじめあわて者ばかり揃っていたので読み違えたのだ。それと、岡山の池田宣政侯が外遊中「一九二五年九月から翌一九二六年六月までの欧米視察を指す」だというニュースを読んで先入観念がいけなかった。(6)

このように本作は池田が「少年団の指導者」として参加したデンマークの第二回国際ボーイスカウト大会を素材とする短編であり、当時の池田は「牛込の余丁町小学校の先生」であった。当時の東京市牛込区余丁町尋常小学校は実践的な新教育の実施で知られ、池田の在職時期に同校に在学していた後の東京教育大学名誉教授・家永三郎いえながさぶろうは「六年生のときの担任だった小山卯八郎先生から最近おきましてはじめて知ったところによると、大胆な新教育の実施で評判の学校だったという。そのせいもあつてか、戦前では珍しいリベラルな教育がおこなわれていた」(7)としている。その具体的な教育内容については教科書裁判である一九六九年七月一二日の東京地方裁判所民事二部において、当時の家永の担任教師で池田と同じく青山師範学校を卒業したばかりの岡野太郎おかのたろうと理科の教科書は使わなくていい。修身の教科書には、くだらないことばかり書いてあるから使う必要がない、理科は実験観察をする学問であつて、本を読むものではないから、使わなくていい」(8)と発言したことを証言している。さらに評論家の長尾和郎ながおかずおは家永の入学から四年後の一九二四年に同校に入学しており、家永の六年の担任であつたという小山卯八郎は長尾の一年から四年までの担任であつた。長尾は一九二八年ないし一九二九年の清水谷公園までの遠出会において、同校校長の日野鶴吉ひのつるきちが同地での大久保利通暗殺について講話したことを回顧し、「日野先生は、当時では進歩的な校長のひとり、歴史教育に立つた人間教育を考え、これを実際に試みたと言つてよいだろう」(9)としている。このように池田が在職していた時期の同校は校長から新任教師に至るまで徹底したリベラル的教育が実施されており、同じく同校を「当時のもつとも進歩的な小学校であつた」とする佐藤忠男さとうただおは、同校在職時の池田が「参観に来た来日中のジョン・デューイ夫妻の通訳をしたこともあり、聖心女子園のガール・スカウト(ガール・ガイドと名乗った)のリーダーになつて一九二三年にデンマークの世界ボーイスカウト大会に参加したこともある」(10)と紹介している。

同校とボーイスカウトの関係については、同校校長の日野が一九三五年から赴任することになる東京市桃園第三尋常小学校に在学した後の茨城大学名誉教授・中川浩一が「日野鶴吉学校長が大日本青少年団結成以前から青少年の集団訓練に熱心で、ボーイスカウトの活動に尽力されて」(11)いたことを証言している。また一九二二年四月には後のエドワード八世である英国皇太子来日を記念する少年団日本ジャンボリーが東京で開催されたが、このジャンボリーの中心組織であった東京聯合少年団の資料からは同月一〇日にそれが「牛込区余丁町少年団主催で余丁町小学校で(中略)講演と活動写真で数多の人に宣伝」(12)されたことが確認できる。このような同校とボーイスカウトとの関係は、次の池田による文章が示すように本作の誕生と密接な関係を有している。

そのころ、わたしは小学校の先生だった。この話を受持ちの生徒に話すと、みな感動した。それほど少年の心に触れる話ならば、一学級の子供にでなく、もっとたくさんの子供に聞いてもらいたいと思った。

わたしは生まれてはじめて少年のための原稿というものを書いた。少年倶楽部へおくった。この処女作がきっかけで原稿を頼まれた。(13)

池田がこの「余丁町小の少年団副団長時代」に「少年団本部委員として派遣された」(14)とされる第二回国際ボーイスカウト大会は一九二四年八月一日から二三日までデンマークのコペンハーゲンで開催された(15)。その後の池田は同年一月二二日に大日本少年団聯盟の臨時研究会に参加した後(16)、翌一九二五年には女子補導団の役員に就任し(17)、同年度の大日本少年団聯盟研究委員として嘱託された(18)。池田はこの大会後にローマ法王やムッソリーニに謁見し、のちに「形見の万年筆」、「やさしい英雄の心」、「イタリヤの足」などでこれらを作品化する(19)。したがって本作は、池田がこの大会に関する多数の思い出のうち最も早くに作品の素材として選択したものである。

### 3 池田宣政「懐しき丁抹の少年」

本作を収録した『輝く凱旋像』は池田が「感動小説としての書き手としての地位を得る」(20)ものとなり、満鉄大連図書館の図書館報『書香』によれば、当時の伏見台児童図書館による「児童むき良書百選」に選ばれている(21)。

同書に「桜ん坊の思ひ出」として収録された本作の冒頭は次の通りである。

大正十三年の夏、丁抹コペンハーゲンの町から五哩程はなれた、エルメルデンの森に世界各地から集まった少年団員が一週間の野営生活をしながら、愉快な遊戯や壮快な競技に日を送った事があつた。

日本からも十数名の代表者が、この野営生活に参加したが、私も其の中の一人だつた。

四十五カ国、四千五百の各国少年と交際した事なので、其の間に忘れられぬ、色々の思ひ出は山程あるが、これも其の中の一つだ。

ここで第二回国際ボーイスカウト大会の開催場所が「エルメルデンの森」とあるが、同大会に参加した佐野常羽はその三年後の一九二七年三月六日の講演において、「一昨々年は各国少年団の国際会議と団員が集まる世界大会とが同時に開かれる年に当つて居りましたので、国際会議は丁抹の首府コッペンハーゲンの市会議事堂で開き、大会の方は王室の御所有になつて居る郊外の大森林で、エルメルデンと云ふ離宮のある処で催されたのであります」(22)と言及している。本作において「色々の思ひ出」の一つとして語られるのは「本当に恐ろしい程の豪雨だつた」という「終りに近づいた二日間」のうち「其の二日目の雨の日」の出来事である。「皆打揃つてコペンハーゲン市の中央ステーションへ其の日英国から到着する少年団の創始者ベーデン、ポエル將軍をお迎へに出掛けた」という「他の者」とは対照的に、「たゞ一人で淋しい留守番をする事になつた」という「私」は、「唯一人東京に残して来た母の事を考へたり、兄妹の事や友達のことを思ひ出し

たりした」が、そこに「頭から黒いマントを被つて居たが、大雨の中を歩いて来たので全身ぬれ鼠の少年が物をも云はず」天幕テントに入つて来て「私」に敬礼した。

私が同じ様にして礼を返へすと、少年は、極くはつきりした英語で——  
何と云つたと諸君は思ひますか。私は其の時の少年の言葉を今も忘れない  
——少年は、はつきりした英語で、

『君は、桜の花の国から来たんでせう』と云つたのだ。

桜の花の国、あゝ、何と云ふ美しい言葉だらう。そして又外国に居る日本人の胸にこの位強く響く言葉はないだらう。

『桜の花の国から来たんでせう』

私は思はず声に力を入れて答へた。

『イエース』

すると少年は、又やさしく微笑したが、

『ぢや、これを君に上げよう』

ポケットを探つて少年は一つの紙包みを取り出したが、私の差し出した手の上にそれを置くや否や、クルリと身をひるがへして足ばやに出て行つた。

『タック』（丁抹語で、ありがたうの意）と私は思はず云つたが、その時は、もう少年は天幕から離れて居た。

ここで「私」が少年から受け取つたのは「見事な見事な桜ん坊」であり、「私」はその理由を「この丁抹の少年は、私達が桜の花の国から来たのだと親からか、先生からか、又は雑誌からかでも伝え聞いたのだらう。少年は東の遠い遠い海の彼方にある小さな島国、そして其所には一ぱい桜の花の咲き誇つてゐる様子を想像したのでらう」と推察して涙ぐみ、これを聞いた「雨の中を帰つて来た友達」も「皆深い感じに打たれた様だつた」。帰国後に「色々の思ひ出が私の心の中に次か

ら次にと浮かんで来た」という「私」が「其の中でも忘れがたいのは、あの桜ん坊を呉れた丁抹の少年の事」であり、「残念な事に私は少年の名を聞き洩らした」と思う「私」は、この話を「丁抹の新聞」に送り、「どうかその少年を探し出したい」と付け加へて置いた。三ヶ月後、「丁抹からの手紙を受けとつた」という「私」は、その差出人が「あの桜ん坊の少年」であることに気づき、「それから後私はこの丁抹の少年と文通してゐる。今では其の少年の母までが手紙をくれたり花を贈つたり本を贈つたりして呉れる」という。本作はその後、「アルネ・ヨルゲンセン——少年の名——の事は、何時も忘れないが、桜ん坊を喰べる頃になると、あの雨の日の天幕の様子があり／＼と私の目に浮んで来る」と結ばれる。

本作のエピソードは池田の『心のともしび 5年生』（ポプラ社、一九五五年）所収の「さくらんぼの思い出」でより詳細に描かれ、本作の「其の日の夕方、私は雨の中を帰つて来た友達の前に、紙包を出した。たゞの桜ん坊だと思つた者も私がその由来を話した時、皆深い感じに打たれた様だつた」における「友達」は「三島団長はじめ、みんな」とされ、そのうちの「久留島先生」は「そうか、どうりておいしい。こんなおいしいさくらんぼは食べたことがない」と発言したことになる。また本作で「私」が手紙を送つた「丁抹の新聞」は実在するタブロイド紙である「コペンハーゲンのB・T」とされ、「B・Tはジャンボリーの記事をたくさんせて、各国のスカウトになじみのふかい新聞だつたからです」とあり、手紙をくれた「少年の母（ラジオ商の妻で三人の男の子をもち、少年は末の子です。）」に「おかあさん」と呼びかける手紙を書いた時には「おまえは、わたしのデンマーク語の手紙がよめたのか、それで、わたしがのぞんだように、母と呼んでくれるのか」と返され、池田の結婚写真を送つた時には「近所の人たちにじまんして、これがわたくしの日本のむすこと花嫁だと見せてまわつたそうです」とも語られている。

そして付記に「先生がかつてヨーロッパを旅行された時、はからずも知つた悲しい日本の一女性の物語をおよせ下さいました」とある池田の「歌なき雲雀 連作小説第1回」（『青空』三巻四号、一九四九年四月）は、「もう二十年にあまる過

ぎざつた遠い日」である「秋十月」に「北欧の美しき平和の小国丁抹の首都コペンハーゲンの中央停車場前の広場に降り立った」という文章で始まる。この小説は共同墓地でその名を発見した日本人の母を持つ「ユリコ・ヨハンセン」について、帰国後に「この不幸で美しい混血少女のみじかい一生をいろいろしらべることができた。(中略)今度「青空」の編集部から長篇の原稿をもとめられて、今こそ二十年もの間、宝石のように私の奥底ふかく秘めておいたユリコの一生の物語を発表すべき時だと思った」と語られているが、そのユリコの祖父の名は本作の少年と同じ「アルネ・ヨルゲンセン」となっている。さらに一九五〇年一月発行の同じく広島図書『あおぞら』四巻一号に掲載された池田の「歌なき雲雀」の最終話は、ユリコの没後に「あるデンマーク人がイタリアに旅をしたとき、ナポリの海に浮ぶ宝石のように美しいカプリの島ちかくで、小さな漁舟のつて釣り糸をたれていた老人が、百合子の祖父アルネ・ヨルゲンセン氏にそっくりだったともらしてしまいました。けれど、たしかなことはわかりません」と結ばれている。

なお実際のアルネ・ヨルゲンセンはその後、第二回国際ボーイスカウト大会が開催されたコペンハーゲンの海運コングロマリットであるA.P.モラー社の船体部門に勤務していた可能性がある。石川島播磨重工業顧問・町田茂は、一九七一年六月下旬に「コペンハーゲンに飛び契約書及び詳細仕様書の打ち合わせに入った」ことを回顧し、「船主側はタイルホイ企画部長、ホイヤー工務部長、アルネ・ヨルゲンセン氏(船体)、C.R.ピターソン氏等が応接に当たった。(中略)夫々有能な人達ばかりで爽やかな気持で打合せが出来た、というのが出張者の一致した感想であった」(23)として「アルネ・ヨルゲンセン」という人物に言及している。

また池田には一九二四年六月六日から渡欧中の様子を記した遺族所蔵の『渡欧日記』があり、同年八月一日には「爾は桜花の国より来れるものか、さらばそれを贈らん」とて桜実を贈るものあり」(24)と記述している。第二回国際ボーイスカウト大会は同年八月一日から一七日まで天幕生活や少年団世界選手権獲得の各国団体競技、二日間の徒歩旅行、作業成績展覧、一八日

から二三日までは歓迎会と宴会が実施された(25)。日本とコペンハーゲンの時差は八時間であり、したがって本作の出来事が「一週間の野営生活」の「終りに近づいた二日間」のうち「其の二日目の雨の日」とあるのは、正しくは「一週間の野営生活」の五日目ということになる。そして池田は一九六四年のエッセイ「一人二役の思い出」において本作のエピソードを次のように紹介している。

四十年前、わたしはコペンハーゲン郊外のエルメルンの大森林で開かれた、世界ボーイスカウトのジャンボリーに日本代表のひとりとして参加した。

ある豪雨の日、わたしはひとりテントでず番をしていた。キャンプ・チエアに腰をおろし、きのうとどいた母の手紙をくりかえし読んでいた。そのころ母と子のふたり暮しだったわたしは、遠い異境の雨の日に読む母の手紙は心にしみた。母を想い故郷を想う気持はせつなかつた。甘い哀愁にみちたノスタルジヤだった。すっかり感傷的になっていた。

ふとテントの吊れ幕があがった。黒いマントをきた少年がはいってきた。全身ぬれぬずみだった。マントのフードをぬいだ。金髪のデンマーク少年だった。碧く澄んだ目でわたしをじっと見て、三本指の敬礼をした。そして、おぼつかない英語でいった。その一語一語まで、わたしは今もはつきりと覚えてい

る。

“You have come from the Country of Cherry Blossom?”

サクラの花の国……今が今まで母を想い故郷を想って深いノスタルジヤにおちついていたわたしに、この一語は強くひびいた。わたしは思わず、聞きかじりのデンマーク語で“La”とさげんだ。

“Well, this is then for you”

少年はマントの下から取りだした小さな紙包みをわたしに渡すと、くりとむきなおつてテントを出ていった。“Tak”とわたしはいったが少年はふり返りもせずに豪雨の中をあゆみさった。(26)

この「るす番」の背景については、これまで参照されてこなかった前年のエッセイ「桜桃の実の思い出」にある日、ボーイスカウトの創始者英国のベーデン・ポーター卿を迎えるために、全ギャンプ村は駅まででかけた。各国のテントにはるす番が一人ずつ残っただけだった。日本のテントには私が残った」(27)とある。これらの文章から池田の感動は、池田がその留守番中に「きのうとどいた母の手紙をくりかえし読んでいた」ことで「今が今まで母を想い故郷を想って深いノスタルジアにおちついていた」ことに由来することが判明する。池田の野口英世のくちひでよの伝記について二上洋一は「野口英世の母シカが、大火傷を負った清作を寝ないで看病するシーンが庄巻だと世評に高かった」としたうえで「池田宣政は一歳の時、全身に大火傷を負い医者に見放された経験があった。母が、それこそ寝もやらずに看病して、宣政は命を取り留めた。母の名はシカといった」(28)と指摘している。

本作は早くに父兄を亡くし、「母と子のふたり暮りだった」池田による母子を描いた一連の作品を先取りするものであり、池田が作家活動を開始する契機においても母・シカがその背景にあったことを示している。本作とそれに関連する「さくらんぼの思い出」や「歌なき雲雀」にいずれも少年の母やユリコの母が重要な存在として登場するのはこれに関連するものであると考えられる。

#### 4 おわりに

本稿では池田の処女作「懐しき丁抹の少年」を注釈的に論じることを通じ、池田のボーイスカウトとその創作活動における母・シカの重要性を明らかにした。池田は南洋一郎の筆名によるアルサーヌル・パンシリーズの翻案で知られるが、ワロールスジャック原作の表題作(原題は *La justice d'Arseme Lupin*)を収録する南名義の『怪盗ルパン全集 29 ルパンと殺人魔』(ポプラ社、一九七九年)には、「モーリスルブラン原作」と称して池田によるパステイ・シユである「女賊とルパン」が収録されている。これは池田名義の作品の特徴とされる「感動美談」であ

り、ルパンが森で出会った少女・アントワヌの母を捜し、その母が逮捕された女賊・クロルドであることを知る。そこでルパンはその後の数年間、母であるクロルドに代わり献身的にアントワヌを育て、出所したクロルドと成長したアントワヌの再会の後、涙ながらにアントワヌと別れるという話である。

このように池田はその処女作から自身の母・シカの影響を思わせる母子の感動美談を描き、それは南名義の怪盗ルパンシリーズでも踏襲されている。この意味において本作は池田の創作活動とその生涯を象徴する作品である。

#### 注

- (1) 尾崎秀樹「第二巻に収録した作品についての解説」(加藤謙一編『少年俱樂部名作選2 長編・中編小説集』講談社、一九七五年)九七六頁。
- (2) 斉藤太郎「池田宣政——南洋一郎の名でも活躍した少年読物作家」(唐澤富太郎編『図説教育人物事典——日本教育史のなかの教育者群像』下巻、ぎょうせい、一九八四年)六五頁。なお「丁抹」の読みは「デンマルク」が正しい。
- (3) 大道晴香「異境から(秘境)へ——南洋一郎の冒険小説に見る戦後の改訂作業をめぐる」(『出版研究』五四号、二〇二三年三月)九〇頁。
- (4) 佐藤宗子「名作再話の確立——池田宣政の三作品を通して」(『千葉大学教育学部紀要』四三号、一九九五年二月)一七一頁。
- (5) 二上洋一「南洋一郎」(朝日新聞社編『現代日本』朝日人物事典)朝日新聞社、一九九〇年)一五六〇頁。
- (6) 加藤謙一「少年俱樂部時代——編集長の回想」(講談社、一九六八年)八六—八七頁。なお本作では正しく池田宣政名義で発表されている。
- (7) 家本三郎「わが思索わが風土」(1) 私と教育 一冊の書との出会い」(朝日新聞)一九七一年五月一七日、夕刊)五面。
- (8) 家永三郎「家永三郎教育裁判証言集」(一ツ橋書房、一九七二年)一一〇頁。

- (9) 長尾和郎「わがうちなる天皇(1) 反逆の思想史をゆく」『月刊世界政経』二巻六号、一九七三年六月)一七九頁。
- (10) 佐藤忠男「池田宣政(南洋一郎)」(加太こうじ・上笹一郎編)『南北社招待シリーズ6 児童文学への招待』南北社、一九六五年)三一八―三一九頁。
- (11) 中川浩一「太平洋戦争中期までの国民学校初等科生活」『茨城大学教育学部教育研究所紀要』二五号、一九九三年三月)三四頁。
- (12) 小柴博ほか『少年団日本ジャンボリー』(東京聯合少年団、一九二二年)一―五頁。
- (13) 池田宣政「一人二役の思い出」『児童文芸』九巻三号、一九六四年三月)二五頁。
- (14) 上田治男「少年読物作家の池田宣政」(東京第一師範同窓会編)『師範教育百二十年のあゆみ』日本教育新聞社、一九九〇年)六六三頁。
- (15) 「少年団国際大会」『少年団研究』二巻一号、一九二四年四月)二七頁。
- (16) 「聯盟情報」『少年団研究』二巻二号、一九二五年二月)二八頁。
- (17) 「聯盟情報」『少年団研究』二巻三号、一九二五年三月)二七頁。
- (18) 「聯盟情報」『少年団研究』二巻五号、一九二五年五月)三三頁。
- (19) 二上洋一『少年小説の系譜』(幻影城、一九七八年)一一八頁。
- (20) 西本鶏介『子どもの本の作家たち 近代の児童文学』(東京書籍、一九八三年)二四三頁。
- (21) 伏見台児童図書館選「児童むき良書百選」『書香』六二号、一九三四年七月)六頁。
- (22) 佐野常羽「丁抹国旗ダーネブロックと日丁の親交」『少年団研究』四巻四号、一九二七年三月)三頁。
- (23) 町田茂「船舶輸出物語 船外の船主群像(11) 北欧の雄「A・P・モラー」」『海運』六九五号、一九八五年八月)九四頁。
- (24) 堀江あき子編『南洋一郎と挿絵画家展——鈴木御水・椋島勝一・梁川剛一の挿し絵を中心に』(弥生美術館、二〇〇四年)二七頁。
- (25) 前掲「少年団国際大会」二七頁。
- (26) 前掲「一人二役の思い出」二五頁。
- (27) 池田宣政「桜桃の実の思い出」『食生活』五七巻一〇号、一九六三年一〇月)五六頁。
- (28) 前掲「少年小説の系譜」一九頁。

#### 付記

本稿は、『国語速報』二巻(国語探究研究会、二〇二六年一月一六日受理)に掲載された論稿を加筆修正したものである。

(くらし) ともや／名古屋大学大学院博士前期課程)